

光の射す方へ

とこちゃん（香川県）

息子がまだ幼かった時、私は高松で高潮の被害を経験した。当時住んでいた埼玉から、たまたま母子で帰省していた時の出来事だった。水没した道路をボールや三輪車がぶかぶかと流れてくる様子が目を疑った。地域の人が「この先は危険だから行ったらだめ」と私の目の前で両手を広げて立ちほだかったことを今でも鮮明に覚えている。当時、息子は二歳。とっさに私は息子をぎゅっと抱きしめていた。この子を離してはいけない、私が守らなければ：そう強く感じていた。そんな記憶がふと今回の震災と重なっていた。同時に「とっさ」の時に親と子がど

うあったかを想像し、胸が張り裂けそうな思いだった。

現在、私は高松市でつどいのひろばを核とした子育て支援を行う団体の代表をしている。震災から一週間後、私たちは大型ショッピングセンターでイベントを行うことになっていった。様々な事が自粛される中で、イベントを開催することに迷いはあった。それでも、私と同じく、どうしたらいいか戸惑い、自分が変わらぬ、日常生活を過ごしていることに罪悪感さえも感じている人が多くいることを知り、みんなの思いを被災地に届ける企画としての開催を決めた。売上と募金を義捐金に充てると内容を一部変更し、多くの人の思いが集まった。私は「なにかしたい」「思いを伝えたい」「できることから動きたい」という思いを肌で感じ、とてもうれしかった。

そしてこの日はもう一つ、うれしい出

来事があった。息子がイベント前夜に突然こう言ったのだ。

「ぼくステージであいさつがしたい。東北の人たちにできることをぼくもしたい」
親としてはびっくりである。彼に大きな舞台で、なにができるのか分からないが任せてみることにした。

「東日本大震災で、今、たくさんの方が大変な思いをしながら頑張っています。ぼくたちと同じ小学生もつらい思いをしながら頑張っています。ぼくたちはみんなの力をあわせて東北に届けましょう。みなさんのご協力、お願いします」メッセージは短いながらも素直で力強いものだった。私と一緒にひろばをつくり、ひろばで育った息子は、たくさんの人に支えられ、見守られて成長してきた。そんな彼が人と人のつながりを大切に思い、伝えてくれたことが嬉しかった。そして同時にその言葉は、未曾有の震災を前に

自分の無力さに嘆き、なにができるかを悩み、葛藤していた私にとって、光の射す方向を教えてくれた気がするのだ。人と人の結びつきのあたたかさを感じられるひろばをつくろうと。人と人が出会い、笑いあえる方向に光は射すのだと。そう思って、私は今日も活動を続けている。誰かのためではない。「人」を助けられるのは「人」でしかないということも一人でも多くの人たちが感じられる地域を目指して…。

